

無薬局地区への移住と開局決断し 地域住民の「安心」増やす

道立病院閉院の危機救う 医療支援チーム参画が運命に



田村 英俊
（たむら ひであき）氏
薬剤師
寿都そよかぜ薬局（北海道寿都郡）

Profile

1997年北海道薬科大学（現北海道科学大学）卒業。1998年室蘭市の調剤薬局に勤務した後、2001年同市の日鋼記念病院薬剤部に転職。2005年寿都町立寿都診療所勤務を経て、2008年寿都そよかぜ薬局開局。プライマリ・ケア連合学会北海道ブロック支部幹事、全国薬剤師・在宅療養支援連絡会（J-HOP）北海道ブロック副ブロック長のほか、寿都町の学校薬剤師、教育委員、民生・児童委員など多数の公職を務める。

道立病院廃止の危機を救うため、勤務していた北海道室蘭市の病院から医療チームの一員として寿都町に派遣されたのが運命の始まりです。町長の英断で、道立病院は町立診療所となって再スタート。薬剤師として、診療所の運営をサポートするのが田村英俊氏の役割でもありました。さらに町立移管後は、院内処方から院外処方へと切り替えることが決まっていた。しかし、寿都町を含めた南後志地区には薬局が一軒もありません。地域住民や医療環境に寄せる熱い思いが、「移住」して自ら開局という人生最大の決断へとつながりました。無薬局町村が少なくない北海道。田村氏の孤軍奮闘は17年目に入ります。

廃止免れた道立病院 家庭医療軸に町立診療所として再出発

出身地である北海道伊達市の実家は薬局を営んでおられたとうかがっています。

田村 父も薬剤師で小さな個人薬局を経営していました。私自身は、薬剤師になった最初の3年間は室蘭市の調剤薬局に勤務し、その後は同じ室蘭市にある日鋼記念病院の薬剤部に転職しました。

日鋼記念病院は、疾病や患者の性別・年齢などにと

らわれず、患者や地域住民に全人的な医療を提供する「家庭医療」の普及と発展を目指す北海道家庭医療学センターの設立に携わったことでも知られています。緩和ケア病棟を担当していた頃、センターの研修医が毎月のローテーションで外来や病棟に来られ、私が担当していた患者さんの麻薬や特殊な院内製剤などについて熱心に勉強されていました。そうした処方相談を通じて、家庭医の先生方とのご縁も深まり、その中には

後に寿都町立寿都診療所の初代所長となられる中川貴史先生もおられました。今振り返れば、それが私と寿都町を結ぶ端緒だったかもしれません。

室蘭市と寿都町では毎日通える距離ではありません。田村さんが寿都町に転居するまでには、どのような経緯があったのでしょうか。

田村 寿都町には60床の道立病院があったのですが、年間4億円もの赤字を抱え、廃止するか町へ移管するかの議論で揺れていました。その頃の寿都町の人口は約4000人でしたが、廃止となれば地域住民への影響は計り知れません。

道立の病院なので道の担当者が町長と打開策を模索していました。そこで「家庭医療」という選択肢があると示唆され、町長の英断で道立病院は「寿都町立寿都診療所」として、総合診療を中心とした地域医療を目指すことが検討されました。しかしながら町に医療経営の経験はなく、医局との関わりもほとんどありません。

酷い嵐の日だったようです。2004年9月、町長はじめ町議会議員全員と役場職員の総勢20人が室蘭市の日鋼記念病院を訪ね、家庭医療学センター開設者の一人



でもある西村昭男理事長（当時）に病院移管後の運営を依頼しました。廃止するとなれば、建物と医療機器だけを残して引き上げるというのが道の判断です。ですから、町が日鋼記念病院側に依頼したのは診療所を運営する「人」の派遣です。嵐の中での申し入れ行脚が功を奏したのでしょうか、西村理事長の計らいで、家庭医のほか看護師、放射線技師、薬剤師による総勢16名の医療チームを編成し、寿都診療所に職員が派遣されることになったのです。

そのメンバーの中に田村さんもいたのですね。

田村 当時の薬剤部長の配慮です。40代以降病院管理職になるために残るか、院外薬局の運営に進むかは30代後半に決めたいという私の将来展望を覚えていてくれたのです。そのとき私は35歳でした。当時住んでいた伊達市からは通える距離ではなく、家族と一緒に寿都町に転居することを決めました。

南後志地区で唯一の薬局を開設 住民の健康管理に責任感と使命感

医療チームの派遣メンバーに加わったことで、田村さんは人生の大きな節目を迎えることになります。寿都町唯一の薬局開設までの経緯をお聞かせ下さい。

田村 2005年4月に旧道立病院の施設で再スタートした町立寿都診療所は、3年後に予定された新築移転に伴い、院外処方に切り替えることが決まっていました。しかしながら寿都町に既存の薬局は一軒也没有。寿都町は人口減少と少子高齢化が進む典型的な過疎の

町です。大手チェーン薬局は、出店したとしても途中で撤退することもできないので尻込みをします。先にも述べたように30代後半には自身の将来を見定めたいと思っていたこともあり、自ら手を挙げ、初代所長の中川先生に「私にやらせてください」と薬局開設の意向を伝えました。

私は日鋼記念病院薬剤部からの派遣なので当初は1年交替の予定だったのですが、診療所を受診する患者さんとの交流や自分自身が寿都町の住民の一人として暮らすうちに、地域に深く根差した薬剤師の必要性を強く感じるようになりました。

診療所勤務を始めた頃、驚かされたことがあります。患者さんにお薬を渡すと「田村さん、寿都によく来てくれたね」と、とても優しく迎え入れてくださるのですが、決まって最後に「それで田村さんはいつ帰るんだい？」と尋ねられるのです。一人だけではありません。何人もの患者さんに同じことを聞かれました。道立病院の時代は、職員は皆公務員ですから転勤があります。医師をはじめ看護師や薬剤師などの入れ替わりは激しかったと聞いています。寿都町の住民にとって医療従事者とは、よそから来ては、いずれいなくなる人たちというのが当たり前になっていたのです。この現実には私にとって衝撃的でした。

さらに、私が育った伊達市や仕事場でもあった室蘭市には大病院があり、私にとって医療施設は水や空気と同じように、当たり前傍らにあるものと思っていましたが、寿都町ではそうした大病院まで、陸路で2時間もかかります。その頃、私の息子は2歳だったのですが、家族が急病や事故に遭遇したときのリスクや不安を自分のこととして受けとめられたとき、この地域の医療環境を理解し、健康管理に常に不安がつきまとう住民の方の安心が少しでも増えるよう、お役に立てればとの思いが強くなりました。

そんな熱い志が2008年4月の開局につながりました。

田村 移転した診療所の隣に住宅併用の「寿都そよかぜ薬局」を開設しました。診療所に勤務した最後の1年は、院外処方箋を「出す」準備と「受ける」準備を同時に進めながら、寿都町への「移住」を決めた年でもあります。開局当初は薬剤師である妻の他にスタッフ2名の4人態勢でしたが、現在は薬剤師2名、スタッフ6名の8人態勢で、2023年度の受付処方箋枚数は約2万1500枚です。地域性から在宅ケアも欠かせません。施設在宅はなく個人在宅ケアは人数にして月に30人ほど、訪問件数は約70件といったところです。

寿都町の直近の人口は約2600人です。隣接する黒松内町と島牧村を合わせた3町村は南後志エリアと呼ばれますが、このエリアに薬局は寿都そよかぜ薬局1軒だけです。北海道には無薬局町村が少なくありませんが、都市部からはなかなか想像できない医療環境かと思われま。

当然、やりがいがありますね。

田村 それに責任感と使命感でしょうか。薬はただ届くだけではダメなんですね。特に高齢の患者さんは薬を渡したあと、自宅での管理やケアが大切です。そこに力を注いでいきたい。そして、都市部の薬局以上の親切と快適、安心を提供したい。取り巻く状況から、この地域での薬局運営は公共的な事業の色彩が濃いと考えています。



寿都そよかぜ薬局外観

病児保育室併設にも積極的に関与 暮らしの安心感に深く関わりたい

2022年4月には薬局に隣接して「病児保育室
なないろ」が診療所に併設されました。開設に
は薬局のスタッフが関与されたとか……。

田村 スタッフの一人が保育士と幼稚園教諭の有資格
者だったことがきっかけです。病児保育とは病気やケ
ガの子どもや回復途中にある子どもを保育・看護する
ことで、仕事を休むことができない保護者の代わりに
保育士・看護師・医師らが連携し、子どものケアを行
うデイ・サービスです。これら健康のためのアドボカ
シー活動を通じて、医療従事者として地域で暮らすこ
とへの安心感に深く関わっていけたら、と考えていま
す。

今後に向けての目標、指針はありますか。

田村 薬剤師として「現場」の仕事が私のベースです。
そこから離れるつもりはありません。どうも私は困っ
たことを相談されると放ってはおけない性格のようで、
何とか問題解決できるよう一緒に考えゴールまで伴走
するよう心がけています。これからも、そんなふうに
薬局現場でやっていきたい。

それと、将来に光明も見えてきました。寿都町出身
の男の子が現在、私の母校である北海道科学大学薬学
部の6年生なんです。中学生の頃から薬局見学に来て
いました。その彼に“宿題”を出しています。国試に合
格するのは当然として、寿都に戻るときは「彼女」を
連れてくること。将来の奥さんになる人と一緒に、決
して一人では帰ってこないよう言い聞かせています
(笑)。この地域の医療を支える後継者の一人になって
くれば、と期待しています。